古墳巡礼

奈良と桜

桜の季節に合わせて奈良へ出かけた。今年の桜の開花予想は例年に比べて異常に早かったので、半信半疑ながら三月末から四月初めにかけて旅程を組んだ。

東京や大阪の都市部では新型コロナウイルスの感染が拡大し、ステイホームが叫ばれていたが、先のない年寄りはそんなことは言っていられない。家の中に閉じこもっていれば、足腰は弱るばかりである。草木が芽吹き、太陽が燦燦と降り注ぎ、心地よい風が吹き始めれば、外に出たくなるのは歩き始めたミヨチャンだけではない。自家用車での移動と屋外の散策中心の旅ならば感染の危険性は低いと判断した。

吉野山の桜は、標高が高いところなので、さすがに早すぎると思ったが、案に相違して三月末がちょうど満開の時期だった。天気には恵まれたのだが、黄砂の激しい日で、吉水神社から眺める中千本は霞んでいた。

黄砂は今に始まったことではなく、数万年前から日本に飛来していたという。昔の人は何事にも風流だったから、これを「春霞」や「朧月夜」などと呼んで、春の季語とし、和歌や俳句に詠んだ。

吉野山如意輪寺付近の桜

春霞たなびく山の桜花うつろはむとや色かはりゆく（古今和歌集）

金峯山寺ではちょうどご本尊である金剛蔵王大権現の特別ご開帳をやっていて、全身青黒く憤怒の相も恐ろしいお姿を間近に見ることができた。灯明の炎が揺らぐ薄暗い堂内に座して、憤怒のお顔を見上げていると、この世の不条理をともに憤り、業深きわが身の拙劣な生き様を叱るとともに慈しんでくれているような思いにとらわれるのであった。

金峯山寺蔵王権現

浄瑠璃の「壺坂霊験記」で有名な壺阪寺の桜も見事だった。境内の堂塔伽藍を包み込むように咲き誇り、桜の花の中から頭を出したような巨大な石仏のお姿には目を見張った。

飛鳥川の桜・川原寺付近

壺阪寺といえば、私たちの世代になじみがあるのが浪曲「壺坂霊験記」である。浪花亭綾太郎の『妻は夫を労わりつ、夫は妻を慕いつつ・…』の名調子を思い出す。

飛鳥川や佐保川の桜も良かった。川の両岸から土手にかけて萌え出たばかりの緑の草の絨毯が覆っていて、桜の花の色とのコントラストが素晴らしかった。里の桜はそろそろ散り始めていて、花びらが川面をゆっくりと流れ、淀みには花筏を作っているのもなかなか風情があった。

東大寺は二月堂の裏参道が好きな場所なのだが、土塀と石畳の上の桜は静かなたたずまいを見せていた。コロナ禍で観光客が極端に少なく、春爛漫を独り占めするように花を満喫できた。

奈良で好きな仏様を挙げろと言われたら、私はまず三月堂の不空羂索観音を挙げるのだが、沈痛なといってもいいような表情や、堅く合せて合掌する両腕を眺めていると身の引き締まるような思いがする。

暗い堂内で、その厳しいお姿をじっと眺めた後だけに、裏参道をゆっくり下りながら見る桜は、春の光の中で清楚で神々しくさえあった。

人気のない東大寺大仏殿の桜

古墳と国の成立

奈良に足を伸ばしたのは、桜を見るためばかりではない。実は最近、古墳に凝っているのである。三世紀中葉から七世紀末葉までの約三百五十年間を古墳時代というが、全国にコンビニの店舗数をはるかに上回る約十六万基の古墳が作られた。

古墳というのは、地上に土を盛り上げて、その内部に遺体を納める石室を設けたものである。円墳、方墳、八角形墳、前方後方墳、双円墳、前方後円墳などいろいろな形があるが、中でも一番有名なのが前方後円墳ではないだろうか。

上部から見れば鍵穴のような形をした墳丘が東北地方南部から九州にかけて一斉に作られた。前方後円墳は、全国で約四千二百基あるという。

私の住んでいる山梨にも甲斐銚子塚古墳と呼ばれる前方後円墳がある。四世紀後半の築造と推定され、全長が百六十九メートル、後円部の高さは十五メートル、体積は三十万㎥もある。古墳時代前期では東日本最大級の規模になるという。

甲斐銚子塚古墳　４世紀末　東日本最大級の規模

いまではこの古墳を中心に、付近一帯は歴史公園として整備されており、私の憩いの場所の一つである。この古墳を眺めていると、いつも浮かぶのは、ここに葬られているのはだれかという疑問である。千六百年以上も前のことだし、墓誌でも出てこない限り誰の墓か確かめようはない。

誰かは分からなくても、この地に暮らし、大きな権力をもって周りの民に君臨した人物に違いない。四世紀後半といえば仁徳天皇の時代と推定されるが、中央のヤマト王権とはどのような繋がりを持っていたのだろうか、副葬品の鏡や水晶の勾玉はどうやって手に入れたのだろうか、疑問は尽きない。

しかし、被葬者がだれか十分推定できる古墳もあるのである。それが奈良にある陵墓なのである。陵墓とは歴代の皇室関係の墓所で、宮内庁が管理している。

奈良にある陵墓には、邪馬台国の女王、卑弥呼の墓ではないかと推測されている倭迹迹日百襲媛命大市墓、天武天皇とその皇后で皇位を継承した持統天皇の合葬墳墓である檜隅大内陵などが代表格である。日本武尊の父親である景行天

皇や大化の改新で有名な斉明（皇極）天皇の陵墓もある。

これらの人物は中学や高校の歴史の教科書に必ず登場する。日本書紀や古事記を読めば、これらの人物が歴史上果たした役割や人間臭い逸話などを知ることができる。しかしそれだけではあまり親しみがわいてこない。身近に感じられないのである。

これらの歴史上有名な人物が眠る古墳を訪ねるのは、赤穂浪士や美空ひばりの墓を訪れるファンの気持ちに似ていかもしれない。歴史の本に登場するはるか昔の人物でも、その生まれた場所、その活躍した場所、葬られた場所を訪ねることにより、その人をより身近に感じることができる。親しみもわいてくるのではないだろうか。

大仙陵古墳（国土地理院）

古墳を訪ねる楽しみはそれだけではない。古墳は日本という国がいつできたのかということについて考えるための重要な考古学的な資料なのである。

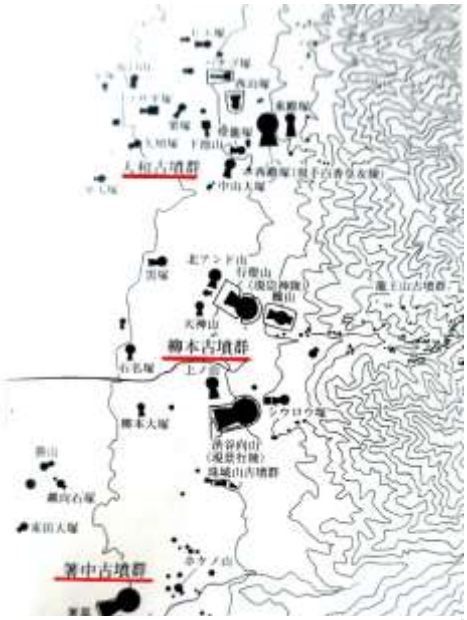
いくつかの地方の「ムラ」あるいは部族が連合し、一つのまとまりを作る連合政権といった時代から、この列島の大部分を支配する日本という国家が生まれた段階がいつ頃でどんな過程をたどったのかを知るのには、権力の象徴である古墳のことを調べるのが手っ取り早い。

日本の歴史をまとめた「古事記」は七一二年に、「日本書紀」は七二〇年に完成したものだ。昔のことは口承で伝えられたというが、正確さにかける。また作成された時代の権力者の思惑に左右され、そのまま信じがたい記述もある。

したがって古代の歴史を検証するには、後代に書かれた文献資料の他に「物的証拠」である古墳などの考古学的遺物から考えることが極めて重要なのである。

三世紀の中葉から奈良盆地東南部の、天理市と桜井市にかけて巨大な前方後円墳が相次いで作られ始める。多くの識者は、これはヤマトの勢力が他の地域の勢力から頭一つ抜け出して大きな力を持ったきざしではないかと考えている。

全国にはこの後、前方後円という同じ規格を持った古墳が相次いで作られる。



奈良東南部の古墳分布（白石太一郎）

近畿地方の古墳群（白石太一郎・古墳とヤマト政権より）

同じ規格の墳墓を作るということは、単に中央の流行の真似をしたのではなく、ヤマトの勢力とのつながりを示すという意図があったのではないかと考えられている。

最大の政治権力が畿内にあり、地方の豪族たちは一定の独立を保ちながら、畿内勢力と同盟関係を結ぶことによって安全保障の裏付けを得た。その代わりに貢納や兵役などの義務を負うといった関係が想像できるのである。

文字が使用されていない時代に、政治的な同盟関係を外交文書で示すわけにはいかない。十字架があればキリスト教だと誰でもわかるように、大きな前方後円墳が同盟関係を示すシンボルだったのだろう。持っている勢力やヤマト王権とのつながりの程度によって、その大きさは制限された。もちろんヤマト王権の大王の墓をしのぐようなものは造れなかっただろう。

大きな古墳を造れるほど大きな勢力を持っていたといっていい。大阪府堺市にある日本で一番大きい仁徳天皇陵古墳（大仙陵古墳）は全長が四八六メートルもある。中国の「秦の始皇帝陵」が三五〇メートル、エジプトの「クフ王のピラミッド」が二三〇メートルなので世界的にみても最大級の墓であることは違いない。

ゼネコンの大林組の試算だと、当時と同じ方法で造ろうとすると、二千人の労働者が十六年間働く必要があるという。かかる費用も現在のカネに換算して約八百億円と膨大な金額で、まさに国家プロジェクトを想像させる。

これだけの大事業を命令し実行するには、かなり広域的な支配力と集中した権力基盤がなければならない。したがって、日本という国の成立を考えるうえで古墳は必要不可欠の材料ということになる。

かくして私の奈良での古墳巡りは始

全国の古墳分布（(白石太一郎・古墳とヤマト政権より）

まった。この紀行を「古墳巡礼」と題したのは、哲学者・和辻哲郎に「古寺巡礼」という名著があるからである。私はこの名著に導かれて若いころからたびたび奈良を訪れた。

「古寺巡礼」は今から約百年前の大正七年頃に和辻が奈良の寺院を訪れたときの心象風景を綴った紀行であり随筆である。若者らしいみずみずしい感性で捉えた多くの仏像や古寺が美しい文章で描写されている。

また哲学の徒らしく、仏像や建築の起源について思索し、美学や美術史の知識を元に、日本の伝統文化とギリシア・インド・中国文化を鋭く比較している。

もとより私は和辻ほどの明晰な頭脳も鋭い感性もないが、杖と「記紀」を頼りに巡り歩いた奈良の古墳について気の向くまま綴ってみたい。

箸墓古墳

最初に訪れたのは箸墓古墳である。箸墓古墳は桜井市箸中にある古墳時代初期の前方後円墳である。すぐ近くには三輪山をご神体とし、大物主神を祀る大神神社や邪馬台国の跡ではないかと推測される纒向（まきむく）遺跡がある。

国道一六九号線沿いの「三輪ソーメンの山本」の駐車場に車を停めて、小雨の中を古墳脇のため池の土手に登った。土手沿いには菜の花と満開の桜が春の雨にしっとりと濡れていた。

小雨の中の箸墓古墳

この池は、かつては墳丘の全周を取り巻くようにあったというが、いまは北西部のみが残されている。ここから眺めると前方部と後円部のくびれが真正面に見えて、前方後円の形がよく分かる。天気が良ければ、古墳の盛り上がりの向こうに三輪山の姿が見えるはずだ。

近くで眺めると改めてその大きさに驚く。全体がうっそうとした樹木に覆われ、千七百年の時の重みが作り上げた幽玄さを漂わせて静まり返っている。

墳丘の表面は、すべて樹木で覆いつくされているが、かつては屋根を瓦で葺くように河原石や礫石が張り付けられていた。いまは樹木が覆い、自然の景観に溶け込んでいるが、巨大な墳丘全体が白っぽい石で覆われていたとすれば異様な雰囲気だし、良く目立ったに違いない。

この古墳の築造に関しては日本書紀

箸墓古墳の航空写真（国土地理院）

に面白い記述がある。

「墓は昼は人が作り、夜は神が作った。大坂山の石を運んで造った。山から墓に至るまで人々が列をなして並び手渡しをして運んだ」

生産力向上には何の役にも立たない墓を、多くの人を動員して造ってもらえるのだから、葬られているのは並みの人物ではないことは確かだ。日本書紀はこの人物を第七代孝霊天皇の娘である倭迹迹日百襲姫命（ヤマトトトヒモモソヒメ）とする。

ヒメは三輪山の大物主神の妻となる。昔は男が女のもとを訪ねる妻問い婚である。訪ねてくるのは顔もわからぬ闇夜ばかりで、暗いうちに帰ってしまう。ヒメは朝まで留まって顔を見せて欲しいと懇願する。

大神は「朝、あなたの櫛を入れる箱の中に入っているけれど、その姿を見て驚かないでほしい」というが、箱を開けたヒメは中にいるのが白い小さな蛇であることに驚いて、思わず大きな声をあげてしまう。大神は「私に恥をかかせたな」と言って三輪山に帰ってしまう。

落胆したヒメは、思わず腰を落とすのだが、その拍子に陰部を箸が貫いて死んでしまう。日本の正式な歴史書である日本書紀に何とも奇妙な逸話が載せられたものだと思うが、これがどんな意味を持っているのか歴史学者も解釈できかねるようだ。ただの夫婦喧嘩の話を載せたとも思えない。

ヒメが神の巫女であることや奇妙な逸話から連想されるのが邪馬台国の卑弥呼だ。「魏志倭人伝」は彼女のことを次のように記述している。

「八十年の間、倭国は乱れ、争いを繰り返していた。そこでみんなで話し合った結果、ひとりの女性を女王として擁立した。名づけて卑弥呼という。鬼道（呪術）にたけており、大衆を幻惑している」

箸墓古墳はかつては四世紀初めころに築造されたもので、卑弥呼の死んだ三世紀半ばごろと時代が合わないという

7　卑弥呼（安田靫彦・滋賀県立近代美術館）

ことで、卑弥呼と箸墓古墳を結び付ける説は単なる空想と思われてきた。

しかし最近、考古学的研究が進み、土器や銅鏡などの副葬品や古墳の上に置かれた埴輪などの造られた年代の幅をほぼ二十年単位ぐらいで特定できるようになった。その結果、箸墓古墳から出てきたこれらの製作年代はいままで考えられていたより古く、三世紀半ばまでさかのぼれることが分かってきた。箸墓古墳の築造年代は卑弥呼の死んだと思われる三世紀半ばと重なるのである。

「卑弥呼が死んだので大きな墓を造った。直径百余歩で、徇葬する者は奴婢百余人」

魏志倭人伝には、卑弥呼が死んで、大きな墓が造られたことが書かれている。いずれにしても日本には同時代の文字資料が存在しないので、箸墓古墳を卑弥呼の墓とする決定的な証拠はつかみようがない。日本書紀には卑弥呼という人物に関する記載は全くない。

倭迹迹日百襲姫命大市墓　拝所

田んぼのあぜ道のような細い道を、ぬかるみに注意しながら拝所に向かった。拝所には宮内庁が管理する古墳の恒例として鳥居と「倭迹迹日百襲姫命大市墓」と彫られた石柱がある。宮内庁が管理する古墳は天皇、皇后、太皇太后、皇太后を葬る所を「陵」、その他の皇族である皇子や皇女を葬る所を「墓」という。

「みだりに域内に立ち入らぬこと」、「魚鳥等を取らぬこと」「竹木等を取らぬこと」という掲示板が示すように、中には立ち入れない。

白い玉砂利が敷き詰められた向こうにある鳥居の前に立ち、深々と一礼して箸墓古墳を後にした。

箸墓古墳が女王卑弥呼の墓だとすると、すぐ近くの纒向遺跡はおそらく邪馬台国の跡だということになる。箸墓古墳の後円部をかすめるように古代の官道上ツ道が走っている。この道を十分ほど北上したところに纒向遺跡はある。

上ツ道は道幅が十八メートルもあったというから、国道一六九号線より広い。纒向遺跡と箸墓古墳と大神神社の位置は、地図上でほぼ一直線に並ぶ。これも何かの因縁だろうか。

纒向遺跡は住宅街の中にあった。遺跡の範囲はＪＲ巻向駅を中心に、東西約二㎞、南北約一・五㎞に及ぶ。遺跡は何年

纒向遺跡

にもわたって発掘調査されているが、まだ全体の五パーセント程度の発掘が終わったに過ぎない。平成二十一年の調査では纒向遺跡は柵や砦で囲まれた都市の一部らしいことが明らかになってきた。

弥生時代の末期から古墳時代の初めにかけて、こんなに大規模な建物群を持った遺跡は当時の倭国の中心である邪馬台国としか考えられない。「魏志倭人伝」では「宮室、楼観は城柵が厳設され、常に人有りて兵を持ち守衛す」と記されている。

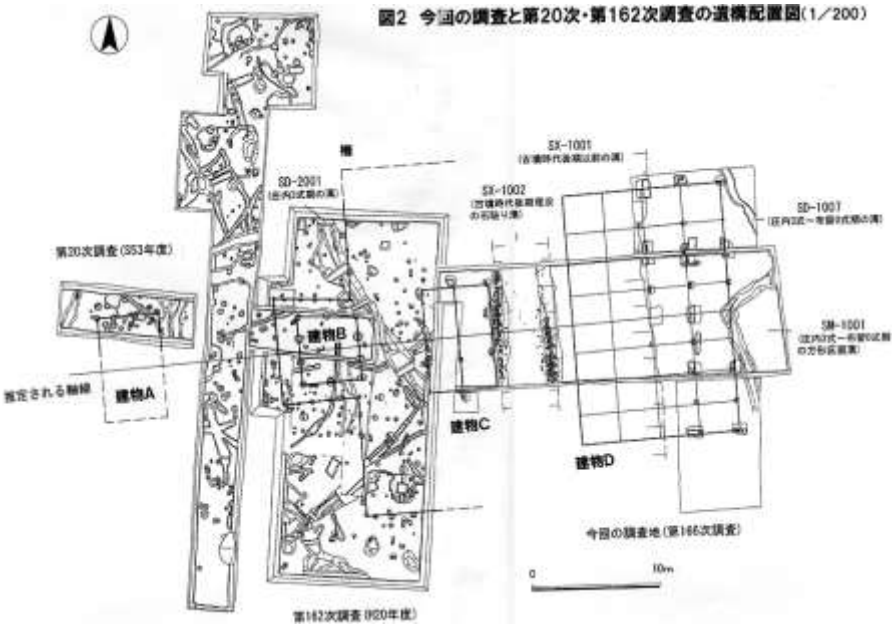
写真は遺跡の中心と思われる辻地区の大型建物跡である。発掘後、遺跡は再び埋め戻されてしまったが、建物遺構の位置を分かりやすく示すために、六十五本の掘立柱建物の柱を復元し、視覚的にも建物の大きさをイメージしやすいようになっている。

再び「魏志倭人伝」から引用しよう。

「卑弥呼は齢はとっているが、夫はおらず弟がいて、卑弥呼をたすけて国を治めている。女王となってからは、その姿を見た者は少なく、婢千人が身の回りの世話をしている。男が一人いて、女王の給仕をしたり言葉を取り次いだりするために宮殿に出入りしている」

卑弥呼は神々しく美しい女性だったと私は想像したい。薄く開かれたまぶたの奥の眼は、人の運命を見通すような鋭さがあったに違いない。めったに姿を見

桜井市教育委員会による



せないことがなおさらその威厳と聖性を高めたであろう。

卑弥呼がここで邪馬台国の女王として共立される前は、倭国は百余国に分かれて戦争状態だったという。その後も狗奴国という国の男王は卑弥呼と仲が悪く、戦争状態が続いていた。邪馬台国は連合政権としてある程度は強力な勢力を持っていたが、列島全体を支配する絶対的な力はまだ持っておらず、卑弥呼も苦労が絶えなかったのではないだろうか。

連合政権内の調整、狗奴国との戦争の指揮、中国や朝鮮半島の諸国との外交交渉など重要な問題の処理に男弟と共に当たっていたのだ。

四大文明発祥の地のひとつ、メソポタミアでは、農業が起こって生産性が高まり、余剰が生まれると、祭祀をつかさどる神官が、神の声の代弁者として民衆の上に立つ。その神官の中から政治的な権力を持った指導者が生まれてくる。邪馬台国はこのような権力が勃興する過渡期にあったのではないだろうか。

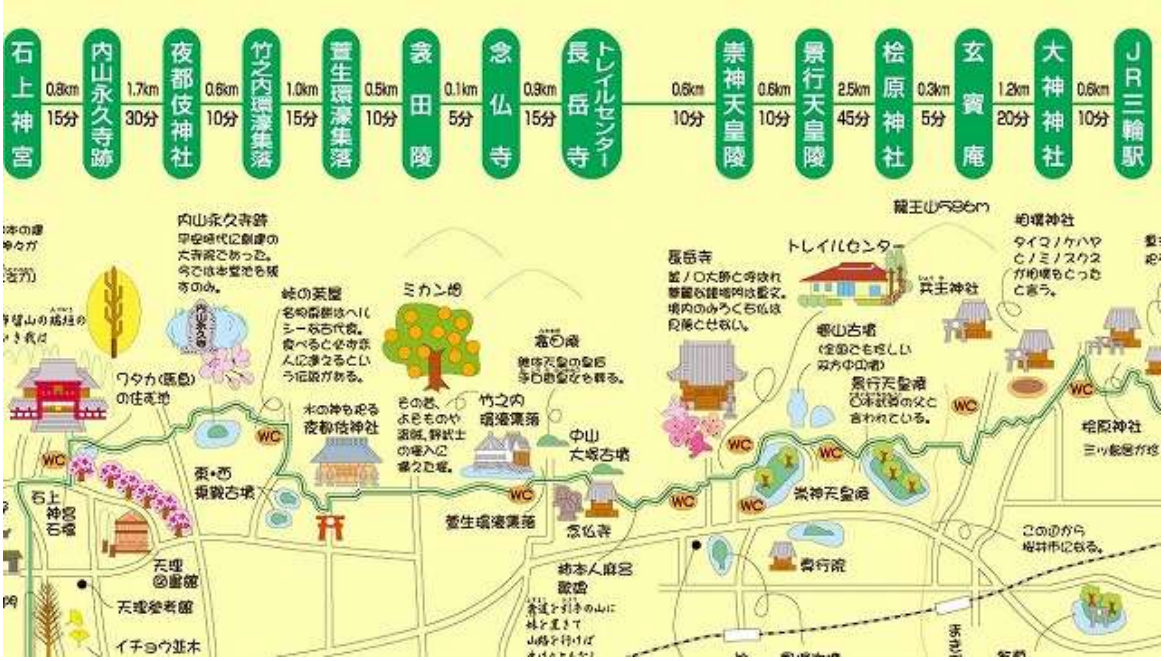
全長が二百メートルを超えるような大きな古墳が三世紀の後葉から奈良盆地東南部に相次いで作られてゆくが、卑弥呼の墓と想定される箸墓古墳はまさにこれらの古墳群の劈頭を飾る大古墳なのである。

考古学者の白石太一郎氏(国立歴史民俗博物館名誉教授)によれば、箸墓古墳に次いでこの地方には、初期ヤマト王権の大王墓と推定される大型の前方後円墳が百年ほどの間に相次いで築造される。ヤマト王権が力を蓄え、クニの形が次第に浮かび上がってくる時代に突入するのである。

山の辺の道と古墳

日本最古の道といわれる山の辺の道を歩いた。山の辺の道は、大和国曾布(現在の奈良市)の春日山のふもとから石上・布留(現在の天理市布留町)を経て三輪に通じていたとみられ、その全長は約三十五キロメートル、幅は二メートル足らずの小道である。

古事記の崇神天皇に関する記述の中にその名が記されていて、四世紀初頭にはすでに利用されていたと考えられて



いる。昔は盆地の中は湿地や沼地が多く、歩きにくかっただろうから、盆地の東の山裾を縫うように自然発生的にできた道であろう。

私が今回歩いたの天理市の石上神宮から桜井市の大神神社までである。ハイキングコースとして人気が高く、コロナ禍がなければ多くのハイカーが行き交うことだろう。距離はおよそ十六キロメートル、私の足で六時間かかった。歩数にすると約二万五千歩である。

案内してくれたのは、奈良生まれで奈良育ちの笠井さん。仕事の関係で知り合ったのだが、地元である奈良の歴史に詳しく、健脚な山男とあればこれ以上のガイドはいない。髪の毛は私と同じように白いが、歳は私より一回りも下で、エネルギッシュである。

沿道には石上神宮、大神神社などの古い神社や、西殿塚古墳（衾田陵）、崇神天皇陵、景行天皇陵などの大型前方後円墳が点在し、古代ヤマトの中心であったことをうかがわせる。

「山の辺の道の多くはまだ未舗装道路なんです。ちょっとした坂はありますが、きつい起伏はありません。土の感触を足裏で感じながら歩けるのがいいんです」

笠井さんは、歩き通せるか心配する私の背中を押すように、歩きやすい道であることを強調する。

「森や竹林を抜けたり、田畑の間を抜けたりと変化にも富んでいます。いま柿の若葉やマンサクの花がきれいだと思いますよ」

古道といっても近代化の過程で大きく変容してしまった道も多い。しかしこの道はいまだにのどかな田園風景を残しているという。

「すべてを細かく見るのは体力的にも

夜都伎神社前　右笠井氏、左筆者

山の辺の道沿いに咲いていた満開のマンサクの花

時間的にも無理なので、いま一番興味ある古墳を中心に歩きたいな」

私は箸墓古墳を訪れたことを伝えながら、古墳に関心があることを伝える。

「山の辺の道の途中には、北から大和、柳本、纒向と三つの古墳群があって、三世紀後葉から四世紀前葉の古墳がたくさんあります」

「卑弥呼の邪馬台国の直後のころで、まさにヤマト政権が誕生した時代ですね」

笠井さんは何回もこの道を友人とともに歩いているが、古墳に興味を示した人は初めてだという。

「私は古墳の上から眺める奈良盆地の景色も好きですね。とくに二上山に夕日が落ちる景色は感激します」

古墳の上から西の方を見れば、眼下に奈良盆地が大きくが開けており、生駒山や二上山、葛城・金剛の連嶺を背景にした大和三山なども遠望できるという。

天気は花曇り、暑くも寒くもないトレッキングにはちょうど良い季節である。

路傍には苔むした道祖神や文人墨客が揮毫した万葉の歌碑も多い。春の妖精のような野の花も咲き競っているだろう。ウグイスが時々間延びした声で鳴いている。まずは足取りも軽く歩き出した。

山の辺の道はその道程の一つひとつを丁寧に描写してゆけば、それだけで百ページを超える紀行になってしまう。出発点の石上神宮だけでも書きたいことは山ほどあるのだ。

しかし今回の奈良訪問は、古墳探索を主眼にしたものである。ここでは山の辺の道の途上にある西殿塚古墳、行燈山古墳、渋谷向山古墳の三つの大きな前方後円墳を取り上げることにする。

まず取り上げるのは、西殿塚古墳である。出発点の石上神宮から約六キロメー

農家が道路わきで季節の野菜などを売っていた

猿田彦大神の石塔と石灯籠　奥は西殿塚古墳

トル歩いたところに萱生の環濠集落がある。奈良県は柿の名産地であるが、萱生は、現在の柿の主力品種・刀根早生柿の発祥の地として名高い。

萱生の家並みを超えた町のはずれの四つ角に、猿田彦大神の石碑と立派な石灯篭が立っている。猿田彦は天孫降臨の際にニニギノミコトの道案内をしたことで、道の神・道祖神と習合し、道の岐れ目などに祀られることが多い。石碑の向こうにこんもりした森のふくらみが見えるが、西殿塚古墳である。

ここから先は柿の畑の間の細い農道を辿るしかない。汚れたズック靴だからいいようなものの、きれいな革靴でも履いていれば気が引けそうな埃っぽい道である。

西殿塚古墳は宮内庁が第二十六代継体天皇（在位５０７～５３１）の皇后、手白香皇女の陵墓に比定して、衾田陵とも呼ばれている。手白香は第二十四代仁賢天皇の娘であり、第二十九代欽明天皇の生母でもある。

古墳の規模は全長約二三四メートル、後円部径一四五メートル、高さ約一六メートル、前方部幅一三〇メートル、東側の裾からの高さ一一メートルである。

柿の畑越しに見ると、東から西に傾斜している土地に、古墳は前方部から後円部の主軸が直行するように南北に横たわっている。坂の途中に長屋を建てるようなものだから、均整の取れた形に仕上げるには、確かな平面測量の技術があったと考えられる。一定の縮尺の平面図や模型が造られ、それに基づいて工事が行われているのだろう。

柿の栽培が盛んだ

西殿塚古墳

考古学者によれば、西殿塚古墳は四段築成の三段目から上が箸墓古墳の三分の二のサイズに企画されているという。前方部の裾が大きく広がって、ばち型になっているのも箸墓古墳などと共通している。おそらく共通の技術者集団が関与し、箸墓のプランが規範になっていたのであろう。

南に向いている前方部の先端に拝所はある。玉砂利を敷き詰められた向こうに石の鳥居が立ち、「手白香皇女衾田陵」と刻まれた石柱が見える。宮内庁が管理している陵墓の拝所の統一したパターンである。

石柵がめぐらされており、中には入れない。帽子を脱ぎ、笠井さんと並んでまずは深々と一礼する。汗ばんだ頭に風が心地よい。

「この古墳は大和古墳群の中でも一番高いところにあるんです。眺めがいいでしょう」

笠井さんは奈良盆地の向こうにかすむ生駒山や葛城山の方向を指さす。

「やまとは国のまほろばたたなづく青垣山籠れるやまとしうるはし、ですね」

私も古事記に出てくるヤマトタケルが詠った望郷の歌をおもわず口ずさむ。

「宮内庁は手白香皇女の墓としていますが、考古学者の研究によれば、この古墳が造られたのは三世紀の後葉であり、箸墓古墳に次いで古い古墳だと推定されています。継体天皇のお后で六世紀の人である手白香皇女の墓ではありえないことは確かなようです」

「宮内庁の怠慢ですね。手白香皇女さんには罪はない。これだけ大きな墓だから並みの人物ではないことだけは確かで

西殿塚古墳　拝所

すね。」

この古墳が手白香皇女の墓だとされたのは明治の初め頃だという。当時は考古学も発達しておらず、後世に作られた文献からの推測なので誤りは仕方がない。しかし、最新の考古学の研究成果を参考にして、明らかに時代が合わない古墳は見直すべきであろう。それが葬られている人に対するせめてもの礼儀というものだろう。

「そうするとこの古墳に葬られているのは誰だろう」

私は再びこんもりした森におおわれた巨大な古墳に目を向けながら、笠井さんに尋ねた。

「箸墓に次いで造られたのですから、卑弥呼を助けた男弟の墓だという見方があります。あるいは卑弥呼の血縁者で十三歳で女王に立てられた台与かもしれません」

「魏志倭人伝」によれば、卑弥呼が二四七年頃亡くなり、その直後に男の王を立てたが、国中が服さず戦乱状態に陥ってしまった。台与が王になると戦乱が収まり、国中が治まったという。武力だけでなく、呪術の力もまだ人々に大きな影響力を持っていた時代ということになる。

ともあれ文字資料は、卑弥呼も台与も、記紀にはその名前がなく「魏志倭人伝」にしか登場しない。また陵墓とされるものは、宮内庁によって発掘はおろか立ち入りさえできないのだから考古資料も乏しい。ある程度は推理で補うしか仕方がないのだ。

さて、西殿塚古墳が台与の墓で、手白香皇女の墓ではないとすると、いったい彼女の墓はどこにあるのだろうか。ところがすぐ近くに彼女の墓にピッタリ符合する古墳があるのである。

西殿塚古墳からは西北に二百メートルほど戻ったところで、萱生の集落の脇にある濠に囲まれた西山塚古墳がそれである。西山塚古墳は墳丘長が一二〇メートルの前方後円墳である。山の辺の道沿いから眺められる。周濠は萱生の集落の環濠の一部としても使われていた。

こちらは墳形や出土した埴輪などの形式から六世紀前半の築造とみられている。まさに手白香皇女の時代にピッタリ合うのである。明治時代、畑として開墾された際には、石棺のほか勾玉・管玉・

本当の手白香皇女の墓と推定される西山塚古墳

鈴・土器・人造石が出土したと伝わるが、今その行方はわからない。う

写真のように後円部は四段の石垣が築かれているが、おそらく畑として利用される過程で築かれたものであろう。上に登ってみたかったが、どこから入ったらよいかわからず、民有地でもあることから断念した。

いまはなにも栽培されていないようだが、ある程度きれいに除草されている。教育委員会の指導があるのであろう。前方部と後円部のつなぎ目は削られて人家らしきものが建っている。これが真の継体天皇の后の墓だとすると、なんともおいたわしい姿である。

なんでこんな取り違えが生じたのだろうか。平安時代中期に編纂された『延喜式』という律令の施行細則をまとめた六法全書みたいなものがある。そのなかに朝廷が管理すべき山陵や墓に関する記述がある。手白香皇女の墓に関しては、「衾田墓」として、大和国山辺郡にあると簡単に記載されている。

大和国山辺郡というのは、現在の萱生町あたりだから、その周辺で一番大きい古墳である西殿塚古墳を手白香皇女の墓にあてたのだろう。

学問が未発達の明治時代、わずか二百メートルで隣り合う二つの古墳を取り違えたことは仕方がない。しかし、もう一度言うが、多くの考古学者が西山塚古墳以外に手白香皇女の墓はありえないと断言しているのだから、宮内庁は早急に誤りを正すべきだ。

再び山の辺の道を南下する。念仏寺を過ぎてのどかな田園風景の中を緩やかな下ってゆくと、柿本人麻呂の歌碑があった。

衾道を引手の山に妹を置きて山道を行けば生けりともなし

引手の山は写真右奥の龍王山の昔の呼び名である。左手に先ほど訪れた西殿塚古墳（衾田陵）が見える。衾道と衾田陵は関係があるのだろうが、詳細は不明である。

柿本人麻呂の歌碑・右奥が歌に詠まれた引手の山

「妹を置きて」の意味がよく分からなかったので帰宅してから調べたところ、「柿本人麻呂・妻死りし後、泣血哀慟して作る歌」という詞書（ことばがき）があることが分かった。

おそらくこの妹は本妻ではなく、若い

お妾さんであろう。当時大流行した天然痘に罹り、乳飲み子を残して死んでしまった。感染症で亡くなったので満足な葬式も出せず、遺体は山へ捨てるように置いてきた帰りなのである。

権力者は庶民を徴用して立派な墓を造ったが、庶民は死んでも野辺に打ち捨てられるのが一般的だった。歌の意味が分かれば、肩を落とし、血の涙を流しながらこの道をとぼとぼ辿る人麻呂の姿が思い浮かび、哀しみは時空を超えて迫ってくる。

長岳寺を過ぎると、すぐに次の目当ての行燈山古墳である。山の辺の道は行燈山古墳の後円部をかすめるように三輪神社に向かって南下している。

行燈山古墳は宮内庁によって「山辺道勾岡上陵（やまのべのみちのまがりのおかのうえのみささぎ）」として陵墓に指定され、崇神天皇陵に比定されている。墳丘の全長は二四二メートル、周濠を含めた全長は約三六〇メートル、最大幅約二三〇メートル、全国第十六位の規模を持つ前方後円墳である。

築造された年代は四世紀中葉と推測されている。全長が二百メートルを超える巨大な前方後円墳だから、箸墓古墳、西殿塚古墳に次いで造られたヤマト王権の首長墓であることは間違いないだろう。被葬者は、古事記によって没年が三一八年とされる崇神天皇の蓋然性が高い。

大きな周濠を持つ行燈山古墳（崇神天皇陵）

崇神天皇は歴史学者によって実在した最初の天皇と考えられている。日本書紀によれば、初代の神武天皇も十代目の崇神天皇もハツクニシラススメラミコト、つまり最初に国を治めた天皇ということになっている。神武天皇とそれに続く系図だけの八代の天皇は、伝えるべき史実の核がないまま系図だけが創作された天皇で、実在しないとの考えが主流だ。

拝所のある前方部は国道一六九沿いなので、大きな濠を半周しなければならない。前を歩いていた笠井さんが振り返って、周濠の土手の上に登ってみませんかと言う。土手の高さは七～八メートルはありそうだ。

「土手の上からの眺めがいいですよ」

「すごい高い土手だね。土手の幅も広いし、きれいに芝生が植えられているし、

行燈山古墳・国土地理院

これは最近の土木工事だね」

「宮内庁が一九七〇年代に、護岸工事をしたというニュースを見た記憶があります」

「濠は相当深そうだけれど、これだけ頑丈に造ってあれば安全だね」

「幕末の尊王思想が勢いを得た時に、皇室関連の古墳の修復が行われたんですね。地元の柳本藩では、この時に水不足解消のために濠を広げたんです。灌漑用のため池としての役割を期待したんです」

土手の上に上がってみると、満々と水をたたえた濠が広がり、その中に浮かぶ墳丘も美しい。稲作にとって水の確保は何よりも重要であるが、古墳の周濠は古墳時代からため池としての役割を期待されていたのだろうか。

行燈山古墳はその墳丘長こそ箸墓古墳や渋谷向山古墳より短いが、大きな周濠まで含めた姿は実に堂々としていて、ヤマト王権の大王にふさわしい。

崇神天皇は列島の各地に、皇族を大将にした軍隊を派遣し、ヤマト王権に従わない多くのクニを服従させたという。

三十か国程度のクニの盟主に過ぎなかった邪馬台国から、東北南部から九州まで力を及ぼす列島の統一政権が崇神天皇の時代にできあがりつつあることが、日本書紀の記事からうかがい知ることができる。

また、日本書紀には崇神天皇の時代に疫病が国中に蔓延し、人口の半分が亡くなったという記載もある。恐らく天然痘の流行であろう。致死率は二十パーセント以上であり、いま流行りの新型コロナ

行燈山古墳　拝所　石段の向こうが周濠

に比べてきわめて高い。

事態を憂えた崇神天皇は斎戒沐浴して宮殿を清め、その原因を夢の中の神のお告げに求める。その結果、大物主神を手厚く祀ることでやっと疫病はおさまったという。その時、大物主神が要求したのが、うまい酒を奉納しなさいということである。

今日の最後に訪れる大物主神を祀る大神神社では、疫病退散を祈願すると同時に、酒好きな神様への感謝もぜひ表明したいものである。

閑話休題。うまい酒を飲むと、すぐ機嫌が良くなるのは神様も私も同じである。飯は抜いても酒を欠かしたことはない。ところが今年二月に長崎大学熱帯医学・グローバルヘルス研究科の北潔教授が「5Iアミノレブリン酸が新型コロナウイルス感染を阻害」という論文を発表した。この物質は天然のアミノ酸だが、なんと日本酒の中に大量に含まれているのである。コロナの殺菌のために日本酒はきわめて有効であり、今後も毎晩、酒の神様に感謝しながら、ありがたく頂戴することにする。

大神神社拝殿

話が妙なところに飛躍したが、ヤマト王権の初代の大王ともいえる崇神天皇の墓に頭を下げずに通り過ぎるわけにはいかない。一度国道まで出て、前方部の正面にある拝所への長い参道を歩く。

参道の両側には、二基の前方後円墳が築かれているが、行燈山古墳の陪塚（ばいちょう）である。陪塚とは、中心となる大型の古墳に埋葬された首長の親族、臣下を埋葬するために築造されたものである。

参道に植えられている松も十分手入れがされており、樹形が整っている。正面の石段は三十段以上あるであろうか、まるでダムの壁のようである。天皇陵ということで箸墓や西殿塚に比べて一層手入れが行き届いているように見受けられるし、たたずまいも立派である。ヤマト王権成立時の崇神天皇のご苦労に思いをはせ、拝所を後にした。

古墳を再び半周し後円部に接する山野辺の道に戻った。景行天皇陵とされる渋谷向山古墳までは約七百メートル、歩いて十分の距離である。

渋谷向山古墳（崇神天皇陵）は全長約

渋谷向山古墳（崇神天皇陵）国土地理院

三〇〇メートルの前方後円墳で、四世紀の古墳としては最大のものである。宮内庁によって山辺道上陵（やまべのみちのへのみささぎ）として十二代景行天皇陵とされているが、この比定は多くの考古学者にも支持されている。

記紀の景行天皇に関する記載は、その息子のヤマトタケルの熊襲征討・東国征討などの英雄譚が多くを占める。ヤマト王権が列島各地に拡大してゆく時代だったのだろう。子沢山でも知られていて、その子供はなんと八十人にも及ぶ。景行紀に「七十余子皆国郡に封ず」とあり、皇子たちを地方領主として列島各地に派遣し、ヤマト王権の拡充に努めたようだ。

渋谷向山古墳　後円部の山の辺の道

山の辺の道はこの古墳の後円部をかすめている。周濠沿いの菜の花の群落がきれいである。拝所を訪れるためには、崇神天皇陵と同じように国道沿いまで再び出なければならない。しかし午後三時を過ぎて、さすがに足が重くなってきた。申し訳ないが、ここはパスさせていただいて、大神神社に向かうことにする。

景行天皇陵を過ぎてしばらく田圃や果樹園の中を行くと、目の前に三輪山が姿を現してきた。大神神社というのは社殿だけでなく、この山全域のことを言うらしい。三輪山をよく眺められる道の曲がり角に額田王の歌碑があった。

天武天皇の時代に都が飛鳥から近江に移るときの歌で、「うまさけ三輪の山あをによし・・・」と三輪山を何度も振り返って懐かしむ歌である。うま酒は三輪山にかかる枕詞だ。

額田王は大海人皇子（天武天皇）の紀となった女性であるが、万葉集に数多くの名歌を残している。小説などでは恋多

額田王の歌碑

き女で絶世の美女ということになっている。さらに里中満智子の漫画「天上の虹」の額田王は、清楚でかつ色っぽく、私は柄にもなくこの少女漫画にのめりこんでしまった。

笠井さんがこの辺で見る盆地の景色が最も好きだという。

「大和三山が見えますよ。右が耳成山、左が畝傍山です。後ろにかすんでいるのは葛城山などの金剛山系です」

「ここは絶好のビューポイントですね。天香具山はどこですか」

「ずっと左手です。近くに箸墓古墳の森が見えますが、その奥あたりでしょう」

残念ながらこの場所からでは、カメラで大和三山を一つのフレームに収めることはできない。私は道端の石に腰を下ろしてしばらくこの光景を眺めた。

「家が立ち並んでいても、山のたたずまいは千数百年前と同じでしょうね。この地に都を営んだ大王たちもこの景色を眺めたと思うと、なんか癒されますね」

笠井さんも大きくうなずくと、持っていたストックで前方を指し示した。

「あのあたりが卑弥呼が都した纒向遺跡です。第十一代の垂仁天皇の纒向珠城宮（まきむくたまきのみや）、第十二代の景行天皇の纒向日代宮（まきむくひしろのみや）も名前の通りこのあたりです。第十代の崇神天皇の磯城瑞籬宮（しきみずがきのみや）も三輪山の南麓ですから、三代の王権が続けてこの山の辺の道の上に都を構えたことになります」

倭から大和へ、そして日本へと歴史は動いてゆく。聖なる三輪山のふもとのこの地は日本の揺籃の地なのだ。

三世紀から四世紀を通じて山の辺の道上に営まれた都は、四世紀末から五世紀かけて難波や河内に移ってゆく。これに伴って王墓も現在の大阪府の南部、堺市、羽曳野市、藤井寺市あたりに移ってゆく。世界最大の墳墓である仁徳天皇陵

額田王　里中満智子

古墳をはじめとする百舌鳥・古市古墳群である。この古墳群では、四世紀後半から六世紀前半にかけて二百基を超える古墳が築造された。

王宮や王墓の場所が移動したのは、単に政治の中心地が移動しただけで担い手は同じと考える説と、それらの移動は権力の移動であると考える説があり、決論は出ていない。

耳成山（右）と畝傍山（左）

私は学生時代に中公新書で読んだ江上波夫の「騎馬民族国家」に大きな刺激を受けた。騎馬民族征服王朝説によれば、朝鮮半島から九州へ渡ってきた騎馬民族が、徐々に畿内に侵入し、ヤマト王権を打倒して河内に新しい王朝を創設する。日本の古代国家の起源を東北アジアの騎馬民族に求めた壮大な説は、私に古代史への扉を開いてくれた

若き日の思い出に浸りながら、再び気を取り直して山の辺の道を進めば今日の目的地の大神神社はもうすぐそこである。

明日香遊歩道と古墳

奈良を訪れるときは、明日香村に宿をとることが多い。都市化が進み、ビルが林立する奈良の中心部よりも、田舎らしさが残る明日香村の方が好きである。明日香は、飛鳥時代の中心地だったとは思えないほどのどかな田園風景が広がっている。かつての王朝の跡も長い歳月を経て土に還った。

明日香村の景観条例では、建物を建てたり一・五メートル以上の塀を作ったりする場合は許可が必要である。外壁や屋

本田和博さん撮影　穏やかな朝(飛鳥資料館　飛鳥の甍写真コンテスト)

根の色も統一されている。だから小高いところから村を眺めれば銀ねずの甍の波の美しさに誰もが感激するはずだ。銀行の屋根もコンビニの屋根もガソリンスタンドの屋根も銀ねずの瓦葺きだ。唯一、瓦葺きでないのは古い役場の庁舎だ。

民宿脇本の入口。奥が母屋

コンクリートの陸屋根で村の景観を壊している。

明日香村に泊まった理由は景観だけではない。歩いて行ける距離にたくさんの古墳があるのである。花の吉野山にも近い。宿は村の観光協会を通じて、民宿脇本に決めた。今回の奈良訪問が古墳巡礼を主目的にしたものだということは前に書いたが、脇本家は明治時代まで代々、檜隈大内陵（天武・持統陵）の維持管理を務める御陵番をしていたという。母屋の座敷の上桟に、提灯をしまって置く提灯箱が飾ってあったが、いずれも年代物で、「山陵御用」と書かれたものや、剣にかたばみの葉を組み合わせた剣片喰紋の家紋入りである。そのほか長押には槍が何本も飾ってあった。

食事を出してくれた女将さんに、御陵番というのは具体的にはどんな仕事をしていたのか聞いてみたが、残念ながら明治のころの話なので要領よい話は聞けなかった。

民宿脇本は檜隈大内陵のすぐ近くにあり、私の泊まった部屋からはこんもりした陵墓が間近に見える。前置きが長くなったが、さっそく古墳巡りに出かけるとしよう。黄砂も収まり、雲一つない好天気である。朝の気温は十五度。杖を頼りに田舎道を歩くのには最適な日和で

ある。

下の欄に、今日めぐる陵墓の地図を載せておいた。右上に天武天皇檜隈大内陵という文字が見える。ここを出発点に、「鬼の俎」、「欽明天皇陵」、「吉備姫王墓」と西に進む。

この後は、国道一六九と近鉄吉野線を超えて、益田岩船遺跡と牽牛子塚古墳を訪れる予定だがその話は後回しにしよう。

山の辺の道沿いにある前方後円墳は三世紀中葉から四世紀後葉の前期古墳であったが、今日尋ねる古墳は六世紀末から七世紀末の古墳時代末期のものである。三輪山麓に営まれた古代ヤマト王権の都は、五世紀に入っていまの大阪府の河内周辺に移る。王朝交代説が唱える第十五代応神天皇を祖とする応神王朝である。

しかしこの応神王朝は第二十五代武烈天皇で途絶えてしまう。「日本書紀」によれば武烈天皇は「頻りに諸悪を造し、一善も修めたまはず」とある。異常性格

で、しかも女性コンプレックスが激しかったらしい。十八歳で亡くなってしまったこともあって、あとを継ぐ男系男子がいなかった。

その後の王権を握ったのが第二十六代継体天皇である。記紀では継体天皇は応神天皇の五世の孫ということになっているが疑わしい。血がつながっていたとしても、五代も前の親戚など正確に確かめられる人はまれであろう。私も菩提寺の過去帳で四代前までは確かめたが、その当時の親戚とはいま全く付き合いがない。五代前の孫が本当だとしても、ほとんど他人と同然である。

継体天皇は越前の出身とされるが、ヤマト王権とは無関係な地方豪族が応神王朝の混乱に付け込んで、実力で大王位を簒奪してしまったのだ。しかし旧王朝の勢力をうまく取り込み、王朝の正当性をアピールするには前王朝の娘を嫁にするのが手っ取り早い。かくして継体は武烈天皇の妹であの西山塚古墳に眠る

手白香皇女を后にし、かつてのヤマト王朝の地に都を営むのである。

継体から始まる第三の王朝は、吉備や「筑紫の君磐井」などの地方豪族の反乱を抑えて、武力による列島の統一をさらに進める。継体から欽明にかけて、列島の政治的統一がほぼ果たされたというのが識者の一致するところだ。

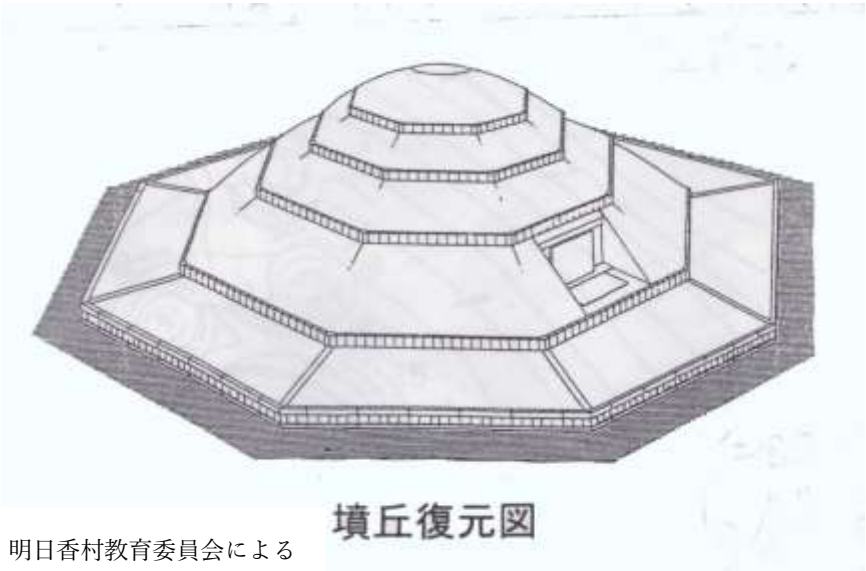
継体から始まる新しい王朝は天武・持統の時代に律令国家としての整備を進め、「天皇」や国名として「日本」を初めて名乗る。

まずは天武・持統合葬墓である檜隈大内陵を訪ねてみよう。民宿脇本を出て県道を渡り、少しだけ近道をして畑の中の細い道を登れば陵の正面に出る。全長が二百メートルを超えるような大型の前方後円墳と比べれば小ぶりだが、丸い小山のように堂々としている。国土地理院の地図で確かめたが、丘陵の張り出した尾根の先端を切り取るようにして、土を盛り上げる手間を少なくしているようである。

檜隈大内陵　天武・持統天皇領

ちょっと見た目には円墳にしか見えないが、宮内庁の調査によれば古墳時代終末期に見られる天皇陵特有の八角形墳だという。墳丘基壇部は敷石が八角形に張られ、墳丘の斜面も石で覆われていたという。対辺の長さは約三十七メートル、高さは七・七メートル。墳丘は基壇も含めて五段に築盛され、最上段は仏塔のように高くなっていたと推定される。

この陵墓は日本書紀によると天武・持統の息子、草壁皇子によって六八七年に天武天皇のために築かれた。その後、天武の皇后であった持統天皇が亡くなると、七〇三年に合葬されたとある。壬申の乱で苦労した二人だから仲が良かっ



明日香村教育委員会による

たのだろう。

天智が亡くなった時、皇位継承候補は天智の弟の大海人皇子と天智の長男の大友皇子の二人がいた。大友皇子側による暗殺を恐れた大海人皇子は頭を丸め、出家すると称して妻の鵜野サララを伴って吉野へこもる。さらには大友皇子側の不穏な動きに急遽、伊勢へ逃れる。十分な準備もなく、冷たい雨の中を徒歩での山越えだった。この時、サララは二十八歳、十歳の草壁皇子を連れての逃避行だった。

尾張あたりの豪族を糾合した大海人皇子は近江の政府軍を撃破し、飛鳥へ凱旋して第四十代天皇に即位する。妻のサララは恐らく聡明な女性だったのだろう、皇后として常に天皇を助け、そばにいて政事について助言したという。

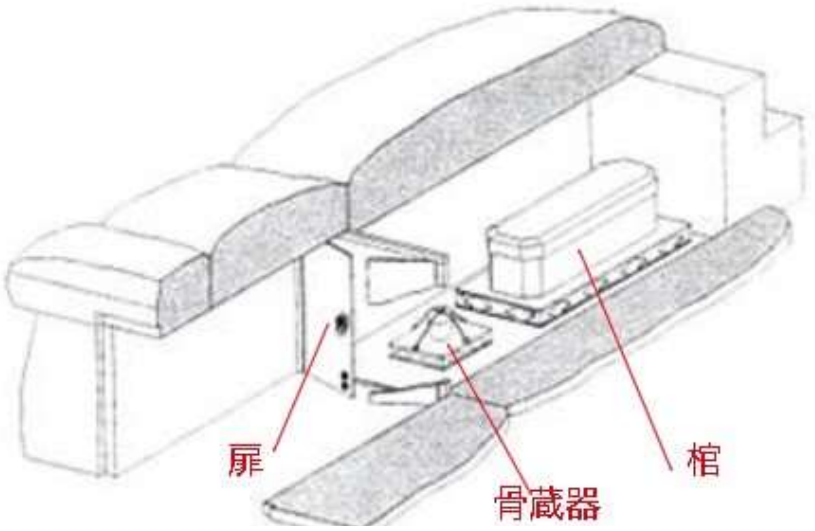
古代史のスパーヒロイン、持統天皇と私の叔母を一緒にしたのでは恐れ多いが、叔母は叔父と同じお墓に入るのはまっぴらだと生前からよく言っていた。夫婦仲が悪いわけではないが、知らない土地にある嫁ぎ先のお墓で眠りたくないということらしい。いまは遺言どおり二人はそれぞれの生家の墓に眠っている。

それはさておき、天武・持統陵は被葬者が明確になっている数少ない陵墓なのである。それはこの陵墓が鎌倉時代に盗掘に会い、その時の石室内部の様子を記した文書が明治時代に発見されたからである。

奈良文化財研究所の井上直夫さんに古墳よる石室の復元図を見てみよう。前期古墳の石室は墳頂部から垂直に造られる竪穴式石室だったが、この時代の石室は横穴式である。石室の奥に天武天皇の棺、その手前に持統天皇の骨壺が置かれている。持統天皇は天皇家で初めて火葬に付されたという記録が残されており、骨壺はこの記紀の記事とも一致する。

考古学者によって再び石室の調査が行われれば、もっと多くのことが分かるだろうが、宮内庁は陵墓は皇室によって祭祀が継続して行われている「生きた墓」で、「静安と尊厳の保持が最も重要」であり、発掘や立ち入りは「厳に慎むべきこと」であるとして発掘どころか立ち入りも許可していない。

しかし盗掘によって荒らされた墓をそのままにして蓋をすることが、果たして「静安と尊厳の保持」なのだろうか。



天武持統陵石室 奈良文化財研究所井上直夫による

内部を検め、盗賊が荒らした後を清めて、再び静かな眠りについて頂くことが「静安と尊厳」を取り戻すことではないだろうか。

天武・持統陵の裏側の道は飛鳥周遊歩道に指定されている。丘陵の南の裾を等高線沿いに横切るように続いており、左手下には県道を行き交う車が見える。農作業用の軽トラックがたまに通る程度の細い道で、ぶらぶら歩きにはもってこいの道である。

この道は奈良盆地を南北に走る大道・下ツ道から飛鳥の都に入ってくる道だったという。下ツ道は七世紀の中ごろに整備された重要な幹道であった。私がいま歩いている道は、かつて中国や朝鮮半島からやってきた人々や文物が行き来した道なのである。

鬼の俎と鬼の雪隠は天武・持統陵のすぐ近くである。飛鳥遊歩道の右手、山側に鬼の俎が、左手の崖下に鬼の雪隠がある。実はこれらは、もとは一つの古墳の石槨(古墳などで棺などを納めるための石の部屋)だったことが明らかになっている。こんな面白い名前が付いたのは、この近くに住む鬼が、旅人を捕らえ、「俎」で料理して食べ、「雪隠」で用を足したという伝説からきている。

鬼の俎（上）と鬼の雪隠（下）

石槨を構成する二つの石材は、いまは地上に露出しているが、もともとは盛り土に覆われていた。それが崖崩れにあって露出してしまったわけだ。俎板が底石、雪隠が側石と天井石が一体となったドーム状の石材だったのである。この古墳の被葬者はわからないが、天武・持統陵から檜隈坂合陵(欽明天皇陵)に至る同じ道上にあるので、皇族あるいは高位高官の墓である可能性が指摘されている。

鬼の雪隠からは明日香村の平田の集落の甍の波が美しい。飛鳥歴史公園の脇に造成された新しい住宅街だろう。家の並びが整然としている。

国立飛鳥歴史公園の森を左手下に見ながらしばらく歩くと、檜隈坂合陵（欽明天皇陵）の周濠の脇に出る。檜隈坂合陵は六世紀末の築造と推定され、古墳時代の終末期の前方後円墳で、全長一三八メートル、後円部の高さは約一二メートルである。宮内庁によって、五七一年に亡くなった欽明天皇の陵墓に指定されている。

周濠は江戸時代末期の文久の修理の時に周囲の田んぼをつぶして造成されたようだ。修陵の時の絵図が残っているが、それを見ると濠らしきものは一部にしかない。また考古学者の森浩一によれば、この修陵の時に、もともと円墳であったものを横にあったもう一つの円墳とつなげて、前方後円墳にしてしまったという。

文久といえば幕末の勤皇思想が猛威をふるった時期である。修陵を担った戸田藩では小さな円墳では恐れ多いと考え、二つの古墳をつなぐことで大きな古墳を造りだしたわけだ。

確かに前方部を見ると、円墳のようにしか見えない。また行燈山古墳（崇神天皇陵）のように前方部に比べて後円部が高い構造ではなく、どちらも同じぐらいの高さである。

欽明天皇陵

欽明天皇といえば、仏教公伝だ。日本書紀によれば欽明天皇十三年（五五二年）に百済の聖明王が欽明天皇に仏像・経典等を届けたという。この新しい神を巡って、受入派と排斥派で何年にもわたって激しい戦いが繰り広げられる。

大王家を支える豪族の中では原始神

道の神事に携わっていた物部氏や中臣氏などは排斥派、渡来人勢力と結びついて開明的だった蘇我氏は受入れ派である。結局、この対立は五八七年、諸皇子を味方につけた蘇我馬子が、武力をもって物部氏の主流を滅亡させたことにより決着する。

仏教受容に対する抵抗勢力の排斥に成功した蘇我氏がその後、勢力を伸ばし、支援した推古天皇が即位する。推古朝では、馬子によって本格的な伽藍を備えた半官的な氏寺・飛鳥寺が建立され、また四天王寺・法隆寺の建立でも知られる聖徳太子（厩戸皇子）が仏教を積極的に取り入れてゆく。

明日香探索をする人たちにとっては欽明天皇陵よりもその脇にある吉備姫王墓の方が人気があるかもしれない。直径七～八メートルの小さな円墳で、わずかに土が盛り上がっている程度である。指摘されなければ古墳とわからないぐらい小さい。

吉備姫王は欽明天皇の孫であり、斉明女帝の母、天智天皇・天武天皇の祖母にあたる。この古墳が人気があるのは、石柱で囲われた墓の中に、猿石と呼ばれる奇妙な人面石があるからである。

江戸時代に欽明天皇陵の南側の田んぼで発見され、ここに運ばれたという。石柵が邪魔をして、四体全部をカメラのフレームに収めることができない。

欽明天皇陵　拝所

吉備姫王墓にある奇妙な石造

亀石

いずれもユーモラスな顔つきをしているが、だれが何のためにこれを刻んだのか諸説ある。私はチベットの密教寺院で、法会の仮面劇の時につける面を思い出した。正倉院にある伎楽面に共通性を見る人もいるし、魔よけのためだという人もいる。

明日香村には謎の石造物が多い。日本は木の文化だというが、今に残る不可思議な石造物は日本にも一時期ではあるが石の文化があったとさえ思わせる。

民宿脇本の近くの路傍に横たわっている亀石などはその代表格であろう。いつの日か、明日香村の謎の石造物を訪ね歩く旅をしたいものである。

朝早くから始まった古墳巡りは、この辺でちょうど昼食時間を迎えた。飛鳥駅近くのコンビニで弁当とお茶を買い、歴史公園の木陰のベンチでしばし休憩することにした。

謎の益田岩船と牽牛子塚古墳

近鉄吉野線の飛鳥駅から線路沿いに十五分ほど北上し、白橿ニュータウンの住宅街を突っ切り、子ども総合支援センターの駐車場脇に益田岩船の登り口を見つけた。この入り口からは結構な急坂を十分ほど登る。

益田岩船は標高一三〇メートルの岩船山の山頂近くにある巨大な花崗岩の石造物である。明日香には酒船石、亀石、

猿石など奇妙な石造物が多いが、益田岩船は、中でも最大規模のものである。東西の長さ十一メートル、南北八メートル、高さ四・七メートル、重さは八百トンはあるという。周囲には同じような花崗岩の岩は見当たらないから、この山の上まで誰かがどこかから運んできたのだろうか。いまの技術をもってしても、これだけの重さの岩を移動することは大変な労苦と技術を要する。

益田岩船

穿たれた二つの方形の穴

危険なので岩の上には登るなと警告板があったので、穴の中をつぶさにのぞき込むことができなかったのは残念である。橿原市が建てた説明版によると、上部には一辺約一・六メートル、深一・三メートルの穴が空けられている。この穴は何のために彫られたのか、誰が造ったのか、この岩の加工の目的については江戸時代から不思議がられており、大和国内の名所旧跡などを紹介した「大和名所図絵」にも図入りで紹介されている。

なんのためにという疑問にはいろいろな説が出されている。近くに築造された灌漑用貯水池・益田池の建造を記念する石碑の台座説、水槽説、物見台説、星占いのための天文台説などである。

「大和名所図絵」には、岩の上からは大変眺めがよく、また人がよじ登っている様子が描かれている。現在は周囲を背の高い竹に覆われてしまっていて眺めは全くない。

しかしつい最近まで竹藪はなかったといわれており、奈良県指定の史跡になっているのだから、管理する橿原市はせめて竹の伐採をして展望を回復してもらいたい。

大和名所図会

さて、私が古墳巡りの最中になぜ山の中の奇妙な岩を訪ねたかというと、益田岩船は古墳の石槨だとにらんだからである。石槨とは、前にも触れたが棺を納める外箱である。写真をよく見てほしい。上部の二つの穴は、この岩を横倒しにすれば二つの棺を納める横口式石槨になる。

なぜ穴が上を向いているかというと、穴を彫るときにその方が作業がしやすいからである。くり抜いた穴の形はきれいな方形だし壁面もなめらかに加工されていて、大変な作業であることが分かるが、なぜこの岩は放棄されてしまったのだろう。

くり抜かれた穴の深さが一・三メートルでは遺体を納めた棺を入れるには短すぎる。作業は途中で中止されたとみるべきだろう。原因は加工のために岩にひび割れが起こったためだ。岩の側面をつぶさに見ると細い亀裂が走っているのが確認できる。

古墳の石室に亀裂が入っているのは致命的な欠陥といっていい。なぜなら土で覆ったときに水が浸入して内部にたまってしまう。さらに上に盛った土の重みに耐えられずに割れてしまう危険性もある。

ここで少し本題を離れて、古墳の石室に使用された石の大きさや形の変化について整理しておこう。石室に使われる石は、年代を経るにつれて大きくなると同時に、石の形は板状から方形に変化する。この変化の到達点が、一つの石をくりぬいて造る益田岩船のような横口式石槨である。

ついでに鬼の俎、雪隠にも触れておこう。これらは石槨の底石と蓋石であると前に書いたが、石槨を作るならば、一つの石をくり抜いて加工するよりは、別々の石を加工して組み合わせるほうが容易であることは明らかである。鬼の俎、雪隠は一石で造る石槨の前段階だといえるだろう。

さて、ところで、実はと、ここで少し勿体をつけるが、岩田石船はこれから訪れる斉明天皇の陵墓をここに作ろうとした跡なのではないかと推理するのである。素人の勝手な推理なので、よそで吹聴しないでもらいたいが、すぐ近くにある斉明天皇の陵墓と考えられている

牽牛子塚古墳の石室と岩田石船の構造は全く同じなのである。最初はここに斉明天皇の陵墓を築こうとしたのだが、あえなく失敗をしたので八百メートルほど南西に作り直したのではないかと私は考えている。

古墳を造るときに、低地の平らなところに土を盛り上げて造るのは大変な労力だし、崩れやすいという欠陥もある。山の尾根の端を切断し、方形あるいは円形に成形すれば、地盤が固いのでしっかりした古墳が造成できる。このような造成方法を丘尾切断型という。

上に示す国土地理院の地図を見てほしい。＋印のところが益田岩船がある場所である。私が赤線を引いたところで尾根を切断し、成形すれば簡単に円墳ができる地形だということがわかるだろう。平地からもよく見える位置である。

素人の勝手な推測はこのぐらいにしておいて、本命の牽牛子塚古墳に足を延ばすとしよう。最初は山を下って住宅街の中を飛鳥駅まで戻ってから、再び山を登りなおさなければならないと思っていたが、尾根伝いに行ける道があることが分かった。上の地図の波線を南に辿る道である。

あまり整備されているとは言えない尾根道を十分ほどたどると、突如として眼下が開けた場所に出た。そしてすぐ目の前に忽然と現れた奇妙なオブジェに、私は腰を抜かさんばかりに驚いた。

木々が鬱蒼と茂り、草深い山の中から一転、赤茶けた土砂が広がり崖崩れの後のような場所に出くわしたのである。最初は自分が何を見ているのか信じられなかった。謎の飛行物体ＵＦＯにでも出会ったのかと思った。

ジャングルのベールに包まれ、だれも訪れることなく長い眠りについていたアンコール・ワット遺跡を発見したフランスの探検家アンリ・ムーオの驚きもこんなものだったかもしれない。

彼はジャングルの中をさまよい歩き、マラリアの危険と闘い、ヒョウや象に立ち向かい、ワニに襲われ、その果てに世界的遺跡を発見したのだから、里山をたった十分ほど歩いた私とはその苦労はくらべものにはならない。しかし驚きは同じだ。

眼前にあるものが復元作業中の牽牛子塚古墳だということを理解するまで少し時間がかかった。古墳だということが分かった後も、飛鳥時代にタイムスリップして、完成したばかりの古墳を眺め

造成工事中の牽牛子塚古墳

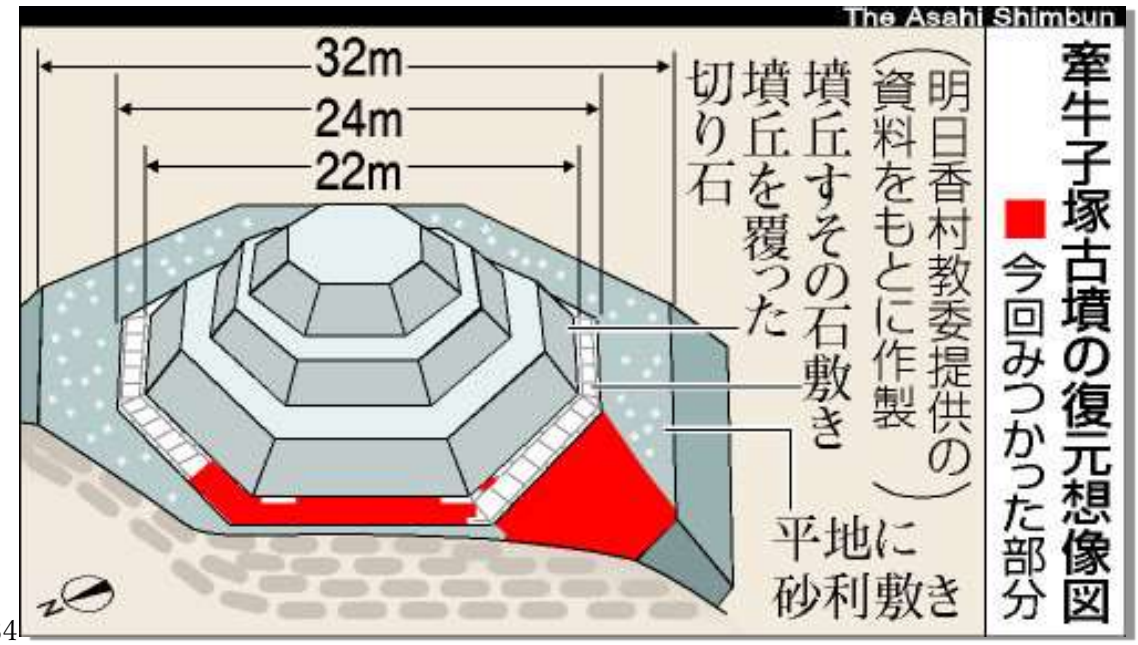
ているような妙な違和感があった。私はこの古墳にすっかりコーフンしてしまった。

平成二十二年九月十日の新聞各紙の一面は考古学の大発見に沸いた。牽牛子塚古墳を調査していた明日香村教育委員会は、墳丘の裾を八角形に囲む敷石や石室を囲む巨大な石柱を発見したと発表したのだ。

天武・持統陵のところでもふれたが、八角形の古墳は天皇クラスに限って用いられる古墳の形なのである。八角形は古代中国の政治思想において、天下八方の支配者にふさわしいという思想の影響を受けたものだ。令和天皇が即位の儀式などで用いられた高御座（たかみくら）も八角形だった。

この発見によって、かねてから論争が続いていた牽牛子塚古墳の被葬者が斉明天皇であることがほぼ確定したのであるが、この発見から二か月後にさらにダメ押しとも思える証拠が明らかになった。この古墳のすぐ近くにそれまでまったく知られていなかった古墳が新たに発見されたのだ。

日本書紀の天智天皇六年に、「二月二十七日。斉明天皇と間人皇女とを小市岡上陵に合葬した。この日に皇孫の大田皇女を陵の前の墓に葬った」という記載がある。新たに発見された古墳が大田皇女の墓だとすれば、日本書紀のこの記載とピッタリ符合する。新たに発見された古墳は古墳の場所の字から越塚御門古墳と名付けられた。



牽牛子塚古墳の発掘調査は大正時代から行われており、大正十二年にはすでに国の史跡に指定されている。この古墳の被葬者として斉明天皇を含む天皇クラスの墓であることは推測されていたが、断定するにはいま一つ決め手に欠けていたのである。

天皇クラス特有の八角形墳、横口式石槨という古墳時代末期（七世紀末の様式、合葬墓であること、近接する古墳の存在。ここまで証拠がそろえば、もはや牽牛子塚古墳は斉明天皇陵であることを疑うことは難しい。

改めて、整備途上の牽牛子塚古墳の写真を見てほしい。この写真は丘の上から古墳を見下ろすように撮ったものである。コンクリートで八角錐の形が再現されている。このコンクリートの壁の上にタイルを張るように凝灰岩の板石が張られて、本物らしく見せることになっているらしい。

横口式石槨の入り口は反対側だ。石槨の内部がのぞき込めるように階段が設けられている。石槨の入り口には鉄柵が設けられていて、内部には入り込めないようになっている。

まだ工事中なので、石槨入り口近くまで侵入し、写真を撮ることははばかられたので、石槨内部の写真は平成二十二年に明日香村教育委員会が発表した写真をご覧になっていただく。

中央に間仕切り壁を有する特殊な構造であり、両側には長さ約二メートルの墓室がある。初めから二人の人物を埋葬する準備がされていたことを想像させる。これが日本書紀の斉明天皇と間

産経新聞

平成22年(2010)日刊第4344号

9|10[金]

奈良・明日香村 牽牛子塚古墳

八角形墳・巨大石柱が出土

被葬者は斉明天皇

天智、天武両天皇の母・斉明天皇（在位655～661年）の墓とされる奈良県明日香村岡の牽牛子塚古墳（7世紀後半）で、墳丘のすぐ下に八角形に囲む敷石や石室前の巨大な石柱が出土し、明日香村教育委が9日、発表した。天皇クラスの墓に限定される八角形墳だったと分かり、被葬者は斉明天皇であることがほぼ確実になった。

（23面に関連記事）

斉明天皇の墓とみられる牽牛子塚古墳。天皇クラスの墓に限定される八角形墳（後方部分）だった ＝奈良県明日香村（本社ヘリから、大阪空港撮影）

八角形墳の被葬者

斉明天皇
舒明天皇
天智天皇
持統天皇
間人皇女
天武天皇
草壁皇子
元明天皇
文武天皇
八角形墳被葬者
別推定

こぶし大の砂利
レンガ状に加工した石
敷石
牽牛子塚古墳のイメージ図
明日香村教育委の資料をもとに作成

奈良市
大阪府
奈良県
明日香村
牽牛子塚古墳
天武・持統天皇陵
岩屋山古墳
都塚古墳
中尾山古墳
高松塚古墳
飛鳥
橿原市
高取町

斉明天皇　舒明（じょめい）天皇の死後、皇孫天皇として即位、642年に皇極天皇として即位。645年の大化の改新の混乱を経たが、655年に斉明天皇として再即位した。百済救援のため九州へ進軍したが、661年に筑紫朝倉宮（福岡）で死去。日本書紀には「船員の命に『運搬道具のため3万人を動員し、人々は一日心煩（たぶれごころのみぞ）』とそしった」と記され、庶民を苦しめた天皇ともいわれる。

墳丘は墳丘の北西部で幅1・1メートル、長さ16・1メートル全面に八角形のうち3辺で、長方形に加工した凝灰岩（1辺30～60センチ、厚さ20センチ）を3列に敷き詰めていた。墳丘の規模は対辺長が約22メートルで、私たちの孔雀には2重に砂利が敷かれていた。

墳丘からはレンガ状に加工した36～40センチの凝灰岩が出土し、築造当初は墳丘斜面にピラミッド状に積み上げていたとみられる。

石室（幅5メートル、奥行き3・5メートル、高さ2・5メートル）は巨大な凝灰岩をくり抜いた構造で、重さ推定70トン。中央を縦に仕切り、2人用の合葬墓として造られていた。

また、石室を囲む柱はいずれも高さ2・8メートル、幅1・2メートル、厚さ70センチで、3本（分を含む）。凝灰岩より硬い石英斑岩が使われ、石室を保護する目的があったと見られる。石室は入り口部分を除き、16本の柱で囲っていたと推測される。

石室の凝灰岩は約15キロ北西の大阪、奈良県境の二上山。石材の安山石は二上山に近い寺山から運ばれてきたとみられている。

一方、墳丘の周囲を石壁の亀裂が確認され、南北朝時代の正平16（1361）年に発生した正平南朝地震などで、大きく損傷したと推測される。

牽牛子塚古墳は大正時代初めと昭和52年の調査で、石室内から漆を塗った棺や銅などの布を貼れた鳳凰紋の棺（宮内庁）の跡、七宝焼の飾金具、人骨などが出土。日本書紀に、第の間人皇女と合葬されたとの記述がある斉明天皇の墓との説が有力視されていた。

八角形墳については、30年以上前の中尾山古墳（明日香村）の発掘で、文武天皇の墓の可能性が高まったと報道。宮内庁管理の天武・持統天皇陵（同村）も八角形墳とされている。

現地見学会は11、12日の午前10時～午後4時。近鉄吉野線飛鳥駅から徒歩約15分。駐車場はない。

河上邦彦・神戸山手大教授（考古学）の話＝八角形墳だったことが発掘調査で証明され、斉明天皇の墓であることが確実になった。大土木工事や九州遠征など、女性とは思えない精力的な働きをしたのは、歴代以上に墓を示そうとしたからだろう。巨石を使った立派な石室は、斉明天皇のこうした思いが込められたともいえる。

横口式石槨の入り口

人皇女の合葬を記した記載と一致するのである。

斉明天皇は古代史のスーパースターだ。ＮＨＫが日曜夜の大河ドラマの主人公に選べば大ヒット間違いなしと思う。私が演出家なら、斉明天皇役は「緋牡丹のお竜」で一世を風靡した藤純子を起用したい。

それはさておき、斉明天皇の波乱の生涯に簡単に触れておくべきだろう。斉明天皇は皇極天皇が乙巳の変（大化の改新）の後に、天皇として再登板した時の名前である。舒明天皇が亡くなった時に、ふつうは息子か兄弟が跡を継ぐ。しかし、舒明の妃だった宝皇女が次期天皇位に着くことになった。皇極天皇である。

これには理由がある。舒明天皇が亡くなった時点で、有力候補として舒明とも王位を争った山背大兄皇子と舒明の長子の古人大兄皇子がいた。どちらを推すか、おそらく群臣の意見が割れて決着がつかなかったのだと思う。

当時、一番勢力を誇っていたのは蘇我氏である。蘇我入鹿は甥である古人大兄を推したかったのだろうが、群臣を押しのけてゴリオシをするほどの力はなかった。

結局、折衷案ということで妃の宝皇女が暫定的に天皇位を継ぐことになった。蘇我入鹿は時機を見て古人大兄にバトンタッチする作戦だったと思う。しかし袖にした山背大兄との仲は険悪化するばかりであった。

皇極天皇の二年、事件は起こる。蘇我入鹿は斑鳩の上宮王家に山背大兄王を急襲し、一族を滅亡に追いやったのである。朝廷は震撼した。

そして、ついに蘇我氏の横暴に対抗しようとする勢力が出現し、乙巳の変が起こる。皇極の長男、中大兄皇子は中臣鎌足の協力を得て、蘇我入鹿を母親、皇極

二室に分かれた石室（明日香村教育委員会）

左奥に逃げるのは皇極天皇。談山神社所蔵『多武峰縁起絵巻』

天皇の目の前で誅殺する。後ろ盾を失った古人大兄は頭を丸めて吉野に隠棲するが、中大兄の放った刺客によって惨殺される。

乙巳の変は、文庫本で上中下全三巻ぐらいになるくらいの出来事なのだが、それをわずか三十行で説明しようとしているのだから、乱暴な話だ。

興味のある方はぜひ日本書紀のこの部分を読んでほしい。まるで古舘伊知郎のプロレスの実況中継のように、こと細かく描写していて、いちばん読みごたえがあるところである。当日のお天気模様まで細かく描写している。

弟の孝徳天皇が乙巳の変の後に即位するが短命で、彼女は再び斉明天皇として表舞台に登場する。時あたかも朝鮮半島の情勢が厳しさを増してきたときである。

唐と結んだ新羅は倭国と仲の良かった百済を滅ぼす。彼女は百済の救済のため皇子らとともに軍を指揮して、みずから九州へ赴く。異国と戦うために天皇が都を離れたのは、日本の歴史上この時のみである。しかし六六一年、斉明天皇は遠征のさなか、九州の地で亡くなってしまう。六十八歳の生涯だった。

この偉大な天皇が葬られている牽牛子塚古墳が、いま明日香村によって整備され、観光の目玉にされようとしている。工事は来年三月のオープンに向かって急ピッチで進められている。県などが「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」の世界遺産登録を目指すなか、牽牛子塚古墳は重要な構成資産の一つとされている。

天皇陵なのになぜこんなことが可能なのだろうか。それは宮内庁がこの古墳を斉明天皇の陵墓とみなしていないからだ。宮内庁が斉明天皇陵に比定しているのは、牽牛子塚古墳から西へ三キロメートルほど離れた車木ケンノウ古墳なのである。

牽牛子塚古墳も車木ケンノウ古墳も日本書紀が記す小市岡にある。車木ケンノウ古墳が斉明天皇陵とされた根拠は、江戸の儒学者、蒲生君平の『山陵志』によるところが大きい。車木は「斉明帝の葬に其の霊車の来り止まる所、因りて名づけて車来といふ」とあり、また地元で呼ばれていたケンノウが天皇に通じるという語呂合わせからだった。

牽牛子塚古墳公園完成予想図

これだけ明確な証拠を突き付けられても宮内庁は斉明天皇陵の比定を変えるつもりはないらしい。発掘成果を知らせる新聞記事には宮内庁書陵部の次のようなコメントが載っている。

「日本書紀は斉明天皇の遺言として古墳築造で民衆を苦しめるなと記しており、牽牛子塚古墳の巨大な石槨と合致しない。現在、宮内庁が管理する奈良県高取町の斉明陵の付近には、太田皇女の墓もあり、日本書紀の記述とも一致する。牽牛子塚古墳が斉明陵という説があることは承知しているが、現在の斉明陵墓

斉明天皇陵入口　正面の階段を上る

を否定するだけの材料がない」

宮内庁は学問の進歩を一顧だにしないつもりのようだ。頑迷固陋とはまさにこのことではないだろうか。

牽牛子塚古墳の見学後、車で十分ほどの距離にある車木ケンノウ古墳へも立ち寄ってみた。宮内庁が整備した数台停

まれる駐車場に車を置き、小高い丘の上まで石段を上る。十分ほど登ると左手に太田皇女の墓が、そのちょっと上に宮内庁が斉明天皇陵に比定する車木ケンノウ古墳がある。

斉明天皇陵は他の天皇陵と同じように前面に石の鳥居が建ち、石柵をめぐらしている。木立に囲まれて墳丘の形はよく分からないが、偉大な天皇の墓としてはあまりに小さく、単なる山の凹凸とみなせないこともない。

最後に牽牛子塚という名前について触れておこう。聞きなれない名前だが、辞書にあたるとすぐ分かった。アサガオの別名とある。恐らく地元の人たちが見上げた時に、古墳の形がアサガオの花びらに見えたからであろう。

ちょっと手間取ったのはアサガオがなぜ牛を牽く子なのかという点である。

実は正確に言うと、牽牛子はアサガオの種のことなのである。アサガオの種は強い下剤作用があり漢方薬として珍重された。牛を牽いて行き、交換の謝礼としたところから牽牛子と呼ばれるようになったのである。

エピローグ　古墳と古代国家

ポール・ゴーギャンの傑作のタイトルに「我々はどこから来たのか、我々は何か、我々はどこへ行くのか」とあることはよく知られている。「我々は何か」と聞かれたら「日本人」と私は答えるかもしれない。しかしその「日本」はいつどのようにしてできたのかまったくもって曖昧模糊としてしている。

日本は紀元前六六〇年建国で、現存する最古の国としてギネスブックに登録されているそうだ。しかしこれはあくまで神話の中の話で、実際の歴史ではない。

大陸から伝わった稲作は紀元前五世紀ごろになると、農具や水路が発達して田んぼの生産力が上がり、食糧が安定して供給されるようになる。コメは貯えることができるからその多寡によって豊かな者と貧しい者との階層化が生まれ、村ができ、それを統率する首長があらわれた。魏志倭人伝によれば、紀元後三世紀の日本には百余のクニがあり、最強のクニが女王・卑弥呼が統率する邪馬台国だったと伝えている。

弥生時代から古墳時代にかけての歴史は，日本列島中央部のヤマトを中心に、列島各地の広い範囲にわたる統合化の変化過程としてとらえることができる。その過程の帰結として、列島の政治的統一を前提とする古代国家「日本」の成立があることは明らかである。その過程を最もよく表す物的証拠が古墳なのである。

「我々がどこから来たのか」を考える道しるべとして古墳を訪ねたいと思い、春の陽光に促されるように大和路を訪れた。もとより古墳は、贅を尽くした建築物や精緻を極める工芸作品などと比べれば面白みに欠ける。

古墳は簡単にいえば地上に盛り土をしたものである。その上、多くの陵墓は石柵が巡らされて立ち入り禁止だし、石室などの内部構造を覗くこともできない。

だから、その古墳にまつわる歴史を知らなければ、古墳はただの土を盛り上げた丘に過ぎない。しかし日本の歴史区分のひとつとして「古墳時代」があることを忘れてはならない。

古墳時代は、前期（三世紀後半～四世紀）、中期（四世紀末～五世紀）、後期（六世紀）と終末期（七世紀～八世紀初め）と四区分されていた。しかし戦後の考古学の発展で、石室の構造の変化、銅鏡や土器などの副葬品の編年が精緻化した結果、その築造年代はおよそ四半世紀程度に分けられるようになった。古墳が築造された年代を百年単位で語っていたものが、二十五年程度のスパンで語られるようになったのである。

これによって記紀などが記す特定人物の没年と古墳の築造年代を比較することによって、被葬者の推定の確度が格段に向上してきた。被葬者が推定される古墳の数はわずかであるが、だれが葬られているのか分からないのに比べれば格段に親しみは湧く。

今回の旅で私が訪れたのは、倭迹迹日百襲姫命（卑弥呼か？）、手白香皇女、崇神天皇、景行天皇、天武・持統天皇、斉明天皇の七人の陵墓である。いずれも古代史を飾るスーパースターであり、日本という国の成り立ちに果たした役割は大きい。

古墳巡礼の旅を終え、この紀行を書き上げてみて、「我々はどこから来たのか」という問いに対する答えの一部が少しはすっきりしたように私は感じている。素人が勝手に推測を重ねた部分もあるが、遠い昔のことゆえに推測で埋めなければ仕方がない部分もある。それがまた歴史のロマンでもある。

しかし推測ばかりで書いたわけではない。白石太一郎歴博名誉教授の「古墳とヤマト政権」には大いに啓発されたし、図表の一部は引用させていただいた。新書本で手軽に手に入るので古墳に関心を持たれた方はぜひ読んでほしい。

私が訪れることができたのはまだ古墳のほんの一部に過ぎない。当分の間、海外旅行は難しいだろうとあきらめている。木々が紅葉するころ、再び大和路を訪れてみたい。

推古天皇や用明天皇の陵墓がある王陵の谷・河内飛鳥は古代の雰囲気を残すのどかな田園風景が広がっているというし、葛城古道や太子ゆかりの斑鳩の里も訪ねてみたい。明日香に散在するなぞの石造物を巡るのも楽しいだろうし、山の辺の道だってもう一度歩きたい。

ＳＴＦの会員の皆さんのなかで、大和路に興味を持ち、旅を共にしたいという方はぜひ声をかけていただきたい。

このつたない紀行を最後までお読みいただいたことに感謝するとともに、ご

感想をぜひお伺いしたいものである。

令和三年六月吉日

Fujizakura